第三種郵便物認可

信毎俳壇

坊城　俊樹 選

古日記暗号辿る夜長かな　（長野市）渡辺　恭子

濡縁で乳哺ませる月の客　（下諏訪町）中村　久

手のひらは今も少年おんこの実　（佐久市）神津　武士

妣の鎌切株美しく稲を刈り　（箕輪町）柴　和夫

運動会身の丈を越す管楽器　（佐久市）西田　和彦

遠き日の日記の余白秋深む　（長野市）荻原　宏祐

地虫鳴く乾びて硬き夜の絵筆　（埼玉県美里町）飯野佳代子

井戸端を寄る辺とせしか残る虫　（佐久市）佐藤　勝子

帰らざる子がまだ一人秋の暮　（箕輪町）向山　政俊

反り返る仁王像の手冬の月　（立科町）村田　実

佳作

稲架解かれ連山腰を上げにけり　（塩尻市）古厩　林生

籾殻に包まれ眠る林檎かな　（佐久市）新地　章倫

選評

一句目、秋の夜長古い日記を見つけた。そこに書かれてある文章が何の事だったかなかなか思い出せない。まるで暗号を辿るが如し。しかし大切な思い出ばかり。二句目、乳をふくませる人は嫁いだ娘さんかと思った。美しい今宵の月の下で母となったわが子の姿に感動する。三句目、おんこ（＝イチイ）の実の赤さは少年時代を回想させる。それをつかんでいる手のひらは少年の面影があるように感じた。

今井　聖 選

おでん皿人の頭の上来る　（長野市）荻原　宏祐

犬を飼ふ決心つきし夜長かな　（小海町）依田　久代

柿剥きの早き母なり故郷よ　（中野市）増田きみ江

茸だけ見ゆる眼となりにけり　（佐久市）神津　武士

新藁に少年の日の父母を嗅ぐ　（長野市）せきたつお

秋を知る蛇口の水の温もりに　（松本市）伊勢ちより

妻となり五十三年目の良夜　（須坂市）丸山　英子

見届けし茸帰りは見当らず　（佐久市）西田　和彦

長生きを哀しむ人や秋の暮　（岡谷市）吉池富貴勇

松葉杖置きて秋の日惜しみけり　（塩尻市）五条　さと

佳作

櫓田の越後平野の広さかな　（飯山市）滝沢　秀誉

鳥籠を焼いて少年上京す　（安曇野市）平　至行

選評

一句目、現実の空間に向けるまなざしは角度によって新鮮な構成を見せる。こういう場面の瞬間があり得ることはみな諾うであろう。二句目、ペットを飼うには熟慮と決断が要る。その命への責任が生じるから。熟慮の時間が「夜長」である。三句目、柿を剥く母の手際への郷愁。それが故郷そのものだとこの句は語る。四句目、そのことしか考えないからそれ以外は見えない眼になっている。

神野　紗希 選

宙は群青雹痕のりんご捥ぐ　（松本市）中村　百仙

秋風や午後の紅茶にライムの香　（長野市）宮沢　信博

補聴器に冬の近づく気配あり　（中野市）芋川　菊水

慣れた過去慣れない未来今は秋　（伊那市）中村　茂子

諏訪人の高き頬骨模糊の実　（安曇野市）平　至行

秋分の日や朝食のカレーパン　（塩尻市）神戸　千寛

秋声の方へと渡る月の橋　（埼玉県美里町）飯野佳代子

うつとりと秋は熟れゆき手風琴　（長野市）武田　芳子

買う気などないが松茸出たかなあ　（佐久市）水間喜美子

初めての握手素秋の別れかな　（長野市）福沢　ナナ

佳作

秋深し口で栓抜く友の逝く　（佐久市）大場　和晴

シンフォニー終われば外の虫しぐれ　（飯田市）原　哲夫

選評

一句目、雹に傷つけられたリンゴを捥ぐ作業は切ない。赤い果実越しの空は、群青に深く澄む。自然は厳しく美しい。二句目、ライムの爽やかな苦みが秋風とフレッシュに響き合い、紅茶をゆたかに香らせる。三句目、通常の聴力では気づかぬ冬の気配を、補聴器がとらえ得た。不自由が引き寄せる感覚もある。四句目は下五の展開力に感服。過去と未来のはざまで揺れ動けば、秋の無常の気分が深まる。